

中世日本海域の墓標 その出現と展開－九州－

中島恒次郎（太宰府市教育委員会）

はじめに

石川県珠洲市野々江本江寺遺跡から出土した木製卒塔婆の社会的位置について、その帰属時期が平安時代後期（12世紀後半）である点、さらにその機能について九州から東北までの事例について議論が交わされた。

卒塔婆の機能については、多くの学説史が説くように、聖者の遺骨（仏舍利）や遺品を納めた土盛りを基調とする塔に起源を発するとされ、インド・サンチーのストゥーパ第1塔が引き合いに出される。その後中国・韓国・日本へと伝来し、「塔婆」「塔」として伝わってきたとされる。日本における「塔」字最古の記述は、『日本書紀』敏達天皇十四（585）年二月条に記される「塔」が知られており、その後の意味変容過程において、①供養具としての卒塔婆、②墓標としての卒塔婆、③境界に建つ卒塔婆の三種が、文献史料、絵画資料から読み取ることができている。いわば、供養→家族などの死者供養としての墓標→不特定多数者の供養と結界の内と外を画す標識へと意味が変容していったことが推測できる。

本研究集会では、野々江本江寺遺跡から出土した大型木製卒塔婆の機能についての議論が中心的課題であった。九州における卒塔婆の出土事例を紹介し、これらの課題に一定の方向性を示したい。

時間・空間変化

九州における卒塔婆出土事例を、表1に示した。これから読み取れるように、木製、石製の卒塔婆の出現時期は、平安後期（12世紀後半代）に求めることができ、野々江本江寺遺跡事例と時間差なく出現している。しかし機能面では、九州における古い事例は、小型の木製卒塔婆であり、供養具としての機能が濃厚な資料である点が異なっている（図1）。また卒塔婆資料の空間的な広がりとなると、出現から約1世紀のズレがあり、鎌倉後期（13世紀後半）以降に増加傾向をみせる。この増加傾向は、いずれも墓標としての卒塔婆であり、被葬者を弔う、追善供養のための標識としての意味が強まっているものと考えられる。

塔婆造立の意味

卒塔婆造立の意味を問うことは、単に卒塔婆のみを見ていては理解できないため、平安後期から鎌倉末期を対象として墓制資料を見てみよう。既に別稿にて記述してきた①屋敷墓、②共同墓地、③石塔、④輸入陶磁器埋納率について検討した結果をまとめた表が、表2である（中島、2009）。

この表から見てくることは、鎌倉期を境として墓制上の変化が「置換」していることが読み取れる。具体的な時間軸は、13世紀後半頃を示している。いわば、本格的な中世的社会が動き始めた時と一致していることが分かる。そこで、2つの項目に分けて考えてみよう。

a. 権力継承権を正当化する装置としての塔婆

鎌倉期を様相置換の期間として、葬儀の場で葬儀参列者に対するステイタスシンボル表徴のための装置が、同時代生活者でなくても被葬者の階層を知ることができる装置として様々な道具が変容していく様をみることができる。これは、崩れてはいるものの古代的制度の「残映」と中世的な領主制に基づく地域統治制度が共存した時代から、自らの階層的位置を自己主張し、かつ継承しなければならなくなった時代への変化を表現しているものと考えられ、供養具としての卒塔婆が墓標として石造化

していく時代背景をみることができる。

b. 境界に建つ塔婆

供養具としての卒塔婆が、先祖供養のための標識としての卒塔婆へ、そして不特定多数者への境界内外を分かつ標識としての卒塔婆へと時間変化に伴い、意味変容をきたしてきた様を見ることが出来る。九州内において、近世に集落の内外を分かつ場に「六地藏」が造立されており、まさにこれらが境界に建つ塔婆の事例である。考古事象上、これがどこまで遡るのか、境界に建つ不特定多数者を供養する卒塔婆を見出すことはできていないが、今後、この視点での抽出を試みてみたい。

おわりに

九州においては、平安後期に供養具として小型の卒塔婆使用が始まり、その後、権力継承権正当化の装置として「朽ちない墓標」である石製卒塔婆が造立されるようになる。今回の研究集会の主題である、境界に建つ卒塔婆事例を見いだすことはできなかったが、集落の内と外を画する場に建つ卒塔婆の出現時期ならびに広がりをおうことは、人と物と情報の往来の多さを知る上で重要な素材の一つである。意味の変容の姿とともに、考古事象上類例の探索を行い、これら卒塔婆の存在する社会的位置と意味を問うていきたい。

引用文献

神埼町教育委員会（1994）『城原三本谷南遺跡』神埼町文化財調査報告書第56集
中島恒次郎（2009）「九州の中世墓」『日本の中世墓』狭川真一編 高志書院

表1. 九州における塔婆

| ■石製塔婆一覧【九州 平安後期～鎌倉期 紀年記載資料】 | | | | | | | |
|-----------------------------|-----------------|-----|------|-------|---|----------------|----------|
| 墓域 番号 | 遺跡名 | 遺構名 | 時代 | 形式 | 備考 | 所在地 | 掲載 文献 |
| 1 | 観音堂梵字 阿弥陀三尊碑 | | 平安後期 | 三尊碑 | 延久二(1170)年二月十七日立之 | 福岡県直方市植木腰町 | 5 |
| 1 | 本光寺塔婆 | | 平安末期 | 塔婆 | 安元元(1175)年十月五日 | 熊本県熊本県黒髪町坪井4丁目 | 5 |
| 2 | 円台寺塔婆 | | 鎌倉期 | 塔婆 | 建久四(1193)・建久七(1196)年 別館から円台寺僧侶の墓塔と考えられる。 | 熊本県熊本県黒木町 | 5 |
| 3 | 富貴寺塔婆 | | 鎌倉期 | 塔婆 | 仁治四(1243)・文本五(1295)年 | 大分県豊後高田市別所町 | 5 |
| 4 | 福平寺塔婆 | | 鎌倉期 | 塔婆 | 文本六(1290)年 | 大分県豊後高田市別所町 | 5 |
| 5 | 蓮華寺塔婆 | | 鎌倉期 | 塔婆 | 文本七(1291)年 | 熊本県埴原郡多良木町蓮華寺 | 5 |
| 1 | 中尾堂寺五輪塔 | | 平安末期 | 五輪塔 | 嘉祿二(1170)・承安二(1172)年 | 大分県臼杵市中尾堂寺 | 5 |
| 2 | 小村重師安五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 寛喜四(1232)年 | 宮崎県宮崎市生田小村 | 5 |
| 3 | 西安寺五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 正嘉元(1257)年 | 熊本県玉名郡玉東町 | 5 |
| 4 | 最明寺五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 正元元(1290)年 | 大分県宇佐郡安心院町下毛 | 5 |
| 5 | 東塔寺五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 建治二(1255)年 | 熊本県玉名郡南関町西豊永 | 5 |
| 6 | 瑞福寺五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 弘安三(1280)年 | 福岡県大牟田市藤田町 | 5 |
| 7 | 勝福寺五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 弘安四(1281)年 | 熊本県埴原郡深田村風茂 | 5 |
| 8 | 浄安寺五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 弘安四(1281)年 | 熊本県埴原郡赤井内田 | 5 |
| 9 | 観音堂五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 弘安八(1285)年 | 宮崎県宮崎郡清武町黒坂 | 5 |
| 10 | 八里合五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 弘安八(1285)年 | 大分県大野郡野津町 | 5 |
| 11 | 西安寺五輪塔 | | 鎌倉期 | 五輪塔 | 正嘉元(1255)・嘉元二(1304)年 | 熊本県玉名郡玉東町 | 5 |
| 1 | 熊野神社板碑 | | 鎌倉期 | 自然石板碑 | 建長七(1255)年 | 福岡県糟屋郡古賀町延内 | 5 |
| 2 | 熊野神社板碑 | | 鎌倉期 | 自然石板碑 | 弘長三(1260)年 | 福岡県三橋郡玄海町吉田 | 5 |
| 3 | 上井田神社板碑 | | 鎌倉期 | 自然石板碑 | 正嘉元(1255)年 | 熊本県玉名郡南関町 | 5 |
| 1 | 大徳寺双塔 | | 鎌倉期 | 宝篋印塔 | 永仁元(1293)年 | 熊本県熊本県野田町川尻 | 5 |

■掲載文献
1 佐賀市教育委員会(1994)『大西屋敷遺跡 Ⅰ』佐賀市文化財調査報告書第56集
2 神埼町教育委員会(1994)『城原三本谷南遺跡 城原三本谷南遺跡』神埼町文化財調査報告書第56集
3 九州歴史資料館(2007)『観世音寺 遺物編2』
4 福岡市教育委員会(1980)『井船跡遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集
5 多田隆雄(1975)『九州の石塔 上巻』(財)西日本文化協会

表2. 九州における墓制

| | 平安中期 | 平安後期 | 鎌倉期 | 室町期 |
|------------|------|------|-----|-----|
| 屋敷墓 | | | | |
| 共同墓地 | | | | |
| 塔婆【木製】 | | | | |
| 塔婆【石製】 | | | | |
| 土葬 | | | | |
| 火葬 | | | | |
| 埋納品【陶磁器埋納】 | | | | |
| 墳墓堂 | ● | | | |

移行

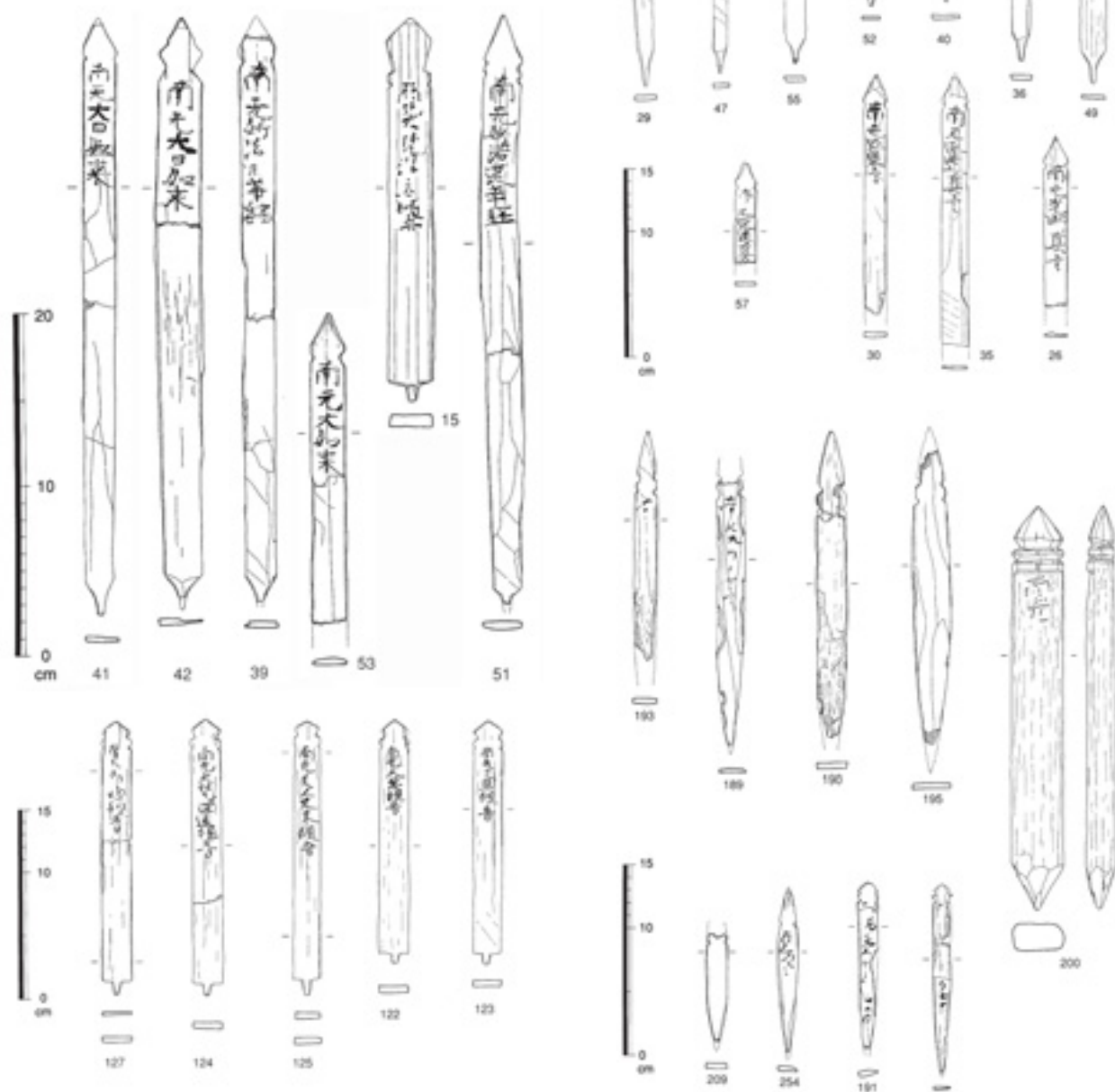


図1. 木製卒塔婆【佐賀県神埼市城原三本谷南遺跡（神埼町教育委員会、1996）】